

編集長からのメッセージ

語用論がニュースに取り上げられる刺激的な日々がまたやってきたようだ。(似たようなことが最後に起こったのはいつだっただろうか? ブッシュ大統領がイギリスのブレア前首相に「よお! ブレア」と話しかけた事件以来だろうか?) この論文を私に送ってくれた人々の数から判断すると、ののしり言葉が「チームワーク」を促進するというニュースは確かに大評判になっているようだ。自分たちがずっとやってきたことがいい結果につながるということを発見するのはワクワクするものだ。この論文の著者たちは、口汚い表現に激怒するのではなく、そのような話し方がいつ「適切なもの」になるかを知るべきだと私たちに警告している。

もし、あなたが私と同じように感じたのであれば、考え込んでしまうだろう。うーん、難しいな、と。ののしり言葉が難しいわけではない。ののしり言葉によって私が同僚と良い関係をつくることができているのは事実だ。難しいのは - - 語用論に関する問題点を学生に説明するのはたいてい困難だが - - ののしり言葉は地雷原になりうるといふことなのだ。私が言語学を教えている学生のひとりが言ったことがある。「私たちは時々、悪い言葉を悪い言葉だと知らずに使ってしまうことがあります。そしてそれがまわりの人を怒らせてしまうのです。」

学生たちは、このようなことを説明してくれる誰かを必要としている。私が昔教えていた、意欲的で礼儀正しい学生が、不運なことにそのよい例になってしまった。彼が大学院を受験しようとしていた時、彼が行きたいと思っている学部で、彼が電話で話しているのを聞く機会があった。応募書類の一部が学校側にまだ到着していないことを知らされた彼は、がっかりしたということを表すために、通常は学部長のような立場の人に使うべきでない4文字の表現を使ってしまったのだ。彼はそれが不適切だということにはまったく気づいていなかった。実際、彼はどこでそれを学ぶべきだったと言えるのだろうか? 映画で? インターネットで? それとも彼の友人たちからだろうか?

私の大学は、世界中の英語圏の国々に学生たちを留学させているが、そのことにより問題はより複雑になっている。アメリカではまったく問題がないのに、イギリスやオーストラリアでは非常識になってしまう表現がある。イギリスでも相当侮蔑的ととられ、アメリカではこれ以上なく侮蔑的とされる表現も少なくともひとつはある。しかしもっとも問題なのは、多くの教師がこのような表現について教室で教えることに不安を感じていることだ。これに対する私

自身のアプローチは以下のようなものである。「あなたがたった今使った単語だけど、ホストマザーには使っては駄目よ」である。学生たちが留学から帰ってきたら、自分たちの犯したミスについて言語学の授業で語ってくれるだろう。

Baruch, Y. & Jenkins, S. (2007). Swearing at work and permissive leadership culture: When anti-social becomes social and incivility is acceptable. *Leadership and Organization Development Journal* 28, 6. pp 492-507.

Anne McLellan Howard
(高橋良子訳)



@#%&*!!

目次

編集長からのメッセージ	1
部会ニュース・お知らせ	2
ジャーナル・ウォッチ	3
大会レポート	4
JALT 2007 プレゼンテーション	5
特集記事	7
by Chie Yamane-Yoshinaga	

「語用論事情」を講読するには:	
JALT 会員:	1500 円
(部会会費を含む)	
非JALT 会員:	2500 円
(この場合講読のみとなります)	